

説教「目が開け、イエスだと」

イザヤ六五・一七～一〇

ルカ 一四・二八～三五

牧師 森田恭一郎

この夏、順に使徒信条に添って御言葉を味わっています。使徒信条は、教会が信じる内容としてこの二千年間、受け継いできたものです。私たちの教会も代々の聖徒と共に使徒信条を告白し同意しています。

さて今日の主題は、二段落目の「三日目に死人の内より、甦り」です。この言葉がその直前の「死にて葬られ」と合わせて考えるとき、この死人の内にある三日間、金曜日の十字架の死から復活前までのあしかけ三日間、主イエスはどのようなだったのか。

神の御子主イエスは、本当に死なれたのでした。使徒信条が「十字架につけられ、死にて、葬られ、陰府に降り」と死に関わる言葉を繰り返し主イエスの亡くなられたことを強調しています。今日の箇所も、ただ甦られたというのではなく「死人の内より」と同様に強調しています。主イエスが亡くなられた後、どこへ行かれたのか。

先週も申し上げましたが、キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らえられていた霊たちの所に行って宣教されました（Ⅰペトロ三・一八）。ペトロが言いたいののは、神であられるキリストが死んで陰府にまで降られて、死の力に捕らえられていた死んだ者たちの所に行き宣教なさった。だから、キリストは肉では死

に渡されましたが、キリストは死んでそこで終わったのではなかった、ということなのです。

主イエスが亡くなられた後、どこへ行かれたのか。肉体は葬られました。「土曜日のキリスト」という題での説教があります（大木英夫）。真つ暗な墓の中に横たわるキリストを思い黙想を広げています。そこでキリストは、その死の世界から、未来へと、甦りへと、聖霊降臨へと、超えて行く橋となつていてという趣旨のことを語っています。

この夏は自然災害が内外問わず多く起こりました。大勢の方々が亡くなられました。被災からの復旧の大変さと合わせて、遺族として遺されてしまった悲しみはどれ程のものでしょうか。なんとこの不条理でしょうか。遺された人は遺影を飾り、形見を手にながら、亡き人の面影を偲びます。信仰の有る無しに拘わらず、亡くなられたご本人にも遺された者にも、また災害以外で亡くなられる方にも、遺された人たちにも、すべての人々に救いが示されねばなりません。その救いは私たちが、輪廻転生の、また暗闇を繰り返す地上の営みに戻ってくるようなものではない。

まっすぐ将来に向かう。あしかけ三日間、肉体として墓の中に横たわったキリストはまっすぐに永遠の命へ超えていく架け橋となつた。再びペトロの言葉ですが私たちにについて語る。死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人間の見方からすれば、肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きる者となるためなのです（Ⅰペトロ四・六）。神との関係で生き

る。それが永遠の命です。

イザヤは主の言葉を預言します。見よ、私は新しい天と地を創造する。初めからのことを思い起こす者はいない。代々とこしえに喜び樂しみ、喜び踊れ（イザヤ六五・一七～一八）。初めからのこと、人間の罪とまた歴史の不条理を思い起こす必要はなくなる。キリストの十字架の故に全ては贖われるからです。人はすべて、キリストとの関係において生きる者となる。キリストは死人の内にある三日間、新しい天と地に向けて死を超えていく架け橋とされました。

主イエスは神として十字架にかけられ死なれました。同じ十字架刑でも、左右の犯罪人の十字架とは意味が違ふ。犯罪人は自分の罪のせいで十字架につけられた。キリストの十字架は、すべての人の罪を贖い神に見捨てられる十字架です。これは神の御子だから、父なる神に見捨てられるこの闇に直面し、すべての罪を担い得る訳です。

三日間、何故三日間なのか。もし、十字架で死んだ主イエスがその日の内に甦られたら、人は、あれは仮死状態だったただけだ、と甦りを信じなくなり。もし、三週間、三ヶ月、三年間だったら、弟子たちは完全にバラバラになったことでしょう。エマオ途上の二人の弟子は近づいてきた見知らぬ人に言いました。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。私た

ちは、あの方こそ、イスラエルを解放して下さると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります」(ルカ二四・一九)。彼らにとつて、望みをかけ続ける限界は三日、それを過ぎると望みを持ち続けることが出来なくなりそうでした。

この二人の弟子にこの見知らぬ人は語りかけます。「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずではなかったか」。聖書全体に亘り、御自分について書かれていることを説明されたのでした。そして家に入り、一緒に食事の咳に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを割いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(ルカ二四・三〇)。御言葉の説明を耳にし、パンと杯を手にしたとき、目が開け、見えないうものに注ぐ信仰の目が開け、イエスだと分かったのです。聖餐です。不思議です。

弟子たちにとつても、私たちにとつても聖餐とそのパンと杯は、遺影や形見以上のものです。聖霊がここに働いて、復活の主に出会う。十字架で贖って下さった罪、罪の赦しも携えておられる。

主イエスは神の御子として十字架におかかりになりました。そして今度は、私たちと同じ人としてお甦りになりました。私たちも自分の事として死人の内からの甦りを信じる事が出来ます。

「本当に主は復活された」と復活の福音を宣べ伝える教会が、主イエス・キリストは、死んだ人に

も生きている人にも全ての人の救い主、主であられることをしっかりと受けとめて人々にまっすぐに福音の橋をかけ、日本伝道に新たな展開を望み見、日本の全ての者が祝福に与るように、と願います。